令和2年度 学校評価総括表

奈良県立橿原高等学校

奈良県教育振興大綱基本理念	育人 ～県民一人一人が学び、育ち合い、潜在力を最大限引き出す～	総合評価
教育目標	豊かな潜在能力を開花させ、知の創造を高め、豊かな感性を磨く。	
学校経営方針	進路第一希望の実現、人間力の向上	

昨年度の成果と課題	令和2年度本校教育のキーワード	具 体 的 目 標	総合評価
思考力・判断力・表現力等の能力を培う主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）を軸とした授業改善の取組、大学入試改革への対応、生徒会を中心とした生徒の主体的な活動、特別な支援を必要とする生徒への細やかな対応、地域との連携をはじめ、学校教育全般において所期の目標を達成することができた。 その要因として、教職員のOJT、Off-JT、自己研修等への積極的な姿勢が、生徒の指導に対して良い影響を与えていると評価をいただいた。 課題としては、授業の予習・復習の継続、学習と部活動との両立には生徒自身の強い意志が求められ、生徒の意欲をより高めるためにも日々の教育活動実践に研修の成果を反映させる更なる取組を推進を図る必要がある。 また、前年度に引き続き、キャリア教育に関わって、進路実現に主体的かつ継続的に取り組む生徒の実践力を高める必要性があげられる。さらに、本校が緊急時の避難所となっていることを踏まえ、地域との連携の一層の強化も必要となる。 本校では、将来の目標を見据えて、常に高い志をもって行動できる生徒の育成に重点を置いている。そのために、「挑戦～何度だって、また、やればいい～」を重点目標に、「環境」「行動」をキーワードとして、カリキュラムマネジメントの観点から、魅力ある学校づくりに努める。	挑戦	大きな志を持ち、夢の実現に邁進する生徒に育てる。 「克己」の精神を身につけ、易きに流れず努力する姿勢を育てる。 発想の起点を変え、物事を多角的に考える。	A
	環境	挑戦を可能にする環境を整える。 「人権教育推進プラン」を踏まえた教育を推進し、互いを大切にする人間関係を育む。	
	行動	熱意を具体的な行動で伝える。 教訓をポジティブに活かし、次につなげる能力を養う。	

	具 体 的 目 標	具体的方策・評価指標	自己評価結果		成果と課題（評価結果の分析）	改善方策等	学校関係者評価(結果・分析)及び改善方策
（1） 学校運営	意欲を持って学校生活に取り組む生徒を育てる。	授業アンケートで「能動的に授業に取り組めている」と回答した生徒の割合は、ここ2年間、57～59%の間で推移している。この状況を改善するため、主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）や反転学習の導入、ICT機器の効果的な活用等により、「能動的に授業と家庭学習に取り組む態度」を育成する。また、授業内容・展開に関する教科内の協議、部活動と勉強についての達成感を高めるための学年内の協議を活発に行い、教員が一層連携し、意欲的に生徒の指導・助言にあたる体制づくりを推進する。 授業アンケート（12月調査）において「受け身でなく能動的に授業に取り組めている」に肯定的な回答が60%以上、かつ橿高生活アンケート（年度末調査）において「部活動と勉強についての達成感」（10点満点）に5.0ポイント以上でA。授業アンケート「受け身でなく能動的に授業に取り組めている」に肯定的な回答45%未満、かつ橿高生活アンケート「部活動と勉強についての達成感」が4.0ポイント未満でC。	A	A	コロナ禍の影響で5月末まではリモート学習が中心となる中、積極的に動画作成に取り組み443本を配信できた。学校再開後の授業では、6教科で県教育委員会指導主事を招いての研究授業を行い、各教科が心を揺さぶり、思考を深める発問を工夫したり、機会ごとに生徒の学習意欲の向上を喚起させたりすることで、主体的・対話的で深い学びの実現に取り組んだ。生徒からは、「進学後に数学を専門的に極めたい」や「大学では本を読み、日本語に強くなりたい」などの前向きな声が出ている。その結果、「能動的に授業に取り組めている」に肯定的な回答が60.2%で、昨年度より3.5ポイント上昇し、目標を達成した。 一方、定期考査前の学習の取組については、学習を1週間以上前から始める生徒の割合が73.2%で、昨年度の81.6%から大きく下げており、また、3時間以上の学習時間を確保している生徒の割合も55.3%で、昨年度の60.0%から下げている。本年度から、部活動の活動時間の見直しを進め、学習時間の確保に努めたが、コロナ禍にあって学習習慣を身に付けることが十分できていない生徒が多くいる。この結果、橿高生活アンケートにおいて「部活動と勉強についての達成感」は5．5ポイントで目標は達成したが、昨年と比較して0．1ポイント下がった。	授業アンケートで「能動的に授業に取り組めている」に肯定的な回答の割合は、過去2年間、57～59%の間で推移していたが、本年度は60%を超えた。この状況を更に推進するため、引き続き指導主事を招いての研究授業を実施し、教科全体で、主体的・対話的で深い学びの導入、ICT機器の効果的な活用等に加え、観点別評価の効果的な運用の研究を推進し、62%以上を目指す。 また、部活動と勉強についての達成感を高めるため、「橿原高等学校の部活動に係る活動方針」を踏まえた効率的な部活動運営を一層推進するとともに、学年内や教科内での協議を活発に行い、教員が一層連携し、学習習慣を根付かせるための生徒への指導・助言にあたる体制づくりを推進し、橿高生活アンケートにおいて「部活動と勉強についての達成感」で5.7ポイント以上を目指す。	・全体としては、積極性が感じられてよかった。 ・来年度も活動に制限があり、生徒の満足度が例年以上の成果を求めることはできないのは当然のことである。職員が本年度に、何を、何のために業務を配分したのかを検証しておく必要がある。 ・リモート教育については、一方通行ではなく、あくまで生徒との信頼関係が最も大切であり、双方向を意識して推進することが大切である。 ・働き方改革については、働き方改革と生徒の関わりが反比例にならないことが大切である。的確な改善方策を示されている。 ・県立高校の統廃合が進む中、本校が存続し続けるために、他校にない特色のある学校づくりをお願いしたい。
	「学び続ける教員」としての自覚と実践を促すための研修を推進する。	教職員が、OJT、OFF-JT及び自己研修の機会を生かし、その研修の成果を校内で共有できる状況をつくる。とりわけ、キャリア教育、生徒指導、人権教育、教育相談、アレルギー対応等の今日的課題に対する研修に加え、修学旅行での感染症発生時対応についても、緊急対応マニュアルを作成し適切に対応するために、事前研修を行う。 教職員一人当たり5回以上かつ延べ300回以上の研修に参加でA。3回未満かつ200回未満の参加でC。	A		校内研修として、服務・文書管理の在り方、リモート学習の進め方、アレルギー緊急時対応、スマホ・インターネットと子どもの人権、教育相談及び修学旅行における感染症予防（第2学年）についての研修を実施し、延べ参加者は240人（6回）であった。また、校外研修については、コロナ禍の影響により校外研修への参加が捗らず、特に教育研究所での研修は法定研修を除いて概ね中止若しくは遠隔研修となり、研修の機会は大きく減ったが、リモート研修を積極的に推奨した結果、延べ226人が参加し、その結果延べ参加者総数は446回で目標を大きく上回った。また、新しく始まった「奈良県版GIGAスクール構想『先生応援プログラム』」のスタートプログラムには約68%の教員が参加した。	コロナ禍の影響のもと、今後は遠隔研修の増加が予想される。これに対応するため、教職員のICT機器活用スキルを向上させるための校内研修を学期に一回以上開催する。また、遠隔研修のスムーズな受講に向けて、カメラやマイク等を含め、ICT環境の充実を図る。その結果、教職員一人当たり6回以上かつ延べ450回以上の研修への参加を目指す。	
	業務改善を行い、教職員の働き方改革を推進する。	教職員が、健康でそれぞれの資質・能力を十分に発揮できるよう、業務の適正な配分と効率化により、全教職員の時間外従事時間の削減を図る。 また、業務全般について関係職員が協働して対応する体制をつくり、職場環境の改善を行い、健康障害の予防を図る。 時間外勤務が、①1か月当たり80時間を超過、②1か月当たり45時間超過かつ3か月連続、③疲労の蓄積が認められる、又は健康上の不安を有する、のいずれかに該当する教職員が0人でA。 ストレスチェック集団分析における本校の「総合健康リスク」が全国平均（100)以下でA。	A		教職員が自己の勤務状況を把握するため、定期的に勤務状況個人票を配布し、意識向上を図った。特に、注意を促す必要のある教職員には個別面談を行い、働き方改革を促すとともに、分掌等においても業務改善が図られるよう分掌長との面談を実施した。その結果、教職員において、①1か月当たり80時間を超過した者は1名（コロナ禍で夏期休業の短縮と部活動の公式戦との重複による）、②1か月当たり45時間超過かつ3か月連続の者は0名、③疲労の蓄積が認められる、又は健康上の不安を有する者は0名であった。また、「総合健康リスク」は95で、全国平均を下回った。	今後も、コロナ禍の中で、業務内容が変化し、勤務時間管理が困難な状況が予測される。分掌長等とも協力のもと校務の適正な配分と効率化を行い、更なる全教職員の時間外従事時間の削減を図り、①～③に該当する教職員を延べ0名にする。 また、健康障害の予防を図るため、業務全般について関係職員が一層協働して対応する体制をつくり、職場環境の改善を行い、「総合健康リスク」は90以下を目指す。	

（2） 学習指導	時間の有効活用と授業における集中度を高める魅力ある授業を展開する。	部活動と学習のけじめを意識的につけさせ、限りある時間を有効活用させる。授業アンケートにおいて「集中して授業に取り組んでいる」が80%以上でA、60%未満でC。	B	B	授業アンケートにおいて、「集中して授業に取り組んでいる」と答えた生徒の割合は78%であった。生徒は概ね授業に集中して取り組んでいるが、授業内容を十分理解できず、集中できていない生徒が全くいないとはいえない現状である。	考査等で不振だった生徒に対して、積極的に補充を行い、クラス全体の学力の底上げを図っていかねばならない。	・コロナ禍の中、生徒一人一人が内発的に学習に向かうよう、きめ細かい取組を期待する。 ・従来の学習形態とは異なる中で、学習到達度を実感としてもたせることが課題である。
	家庭学習を促進する。（平日の家庭学習時間1時間未満の生徒を減らす）	学校での授業を大切にさせるとともに、家庭学習の重要性を認識させ、「予習→授業→復習」の学習サイクルを定着させる。橿高生活アンケートにおいて「平日の家庭学習時間が1時間未満」が25%以下でA、50%を超えるとC。	B		日々の学習においては課題や小テストを実施。長期休業中には、毎日の学習状況を書き込むしおり等を作成し家庭学習を促すとともに、将来の進路実現に向けて、学習することの重要さを伝えている。橿高生活アンケートの結果は47.4%であった。	生徒自ら主体的に学習に取り組むための動機付けとして、将来の進路実現に向けて必要な力を得るための情報発信を積極的に行う。	
（3） 生徒指導 生徒会 教育相談	生徒の基本的生活習慣を確立させることから、克己の精神を育む。	生徒の遅刻回数の減少に努める。生徒に積極的な声がけをして、5分前登校を促す指導を進める。年間遅刻回数が昨年度を100として、98以下でA、102を超えるとC。	C	B	新型コロナウィルス感染症の影響で1学期のほとんどが在宅教育であったため、昨年の第2学期と本年度の第2学期の遅刻回数を比較した。その結果、昨年度418回、今年度482回と、昨年に比べ15ポイントの増加となった。生徒への十分な声かけや指導ができなかった。	朝の立哨指導による生徒への声かけを行い、生き生きとして登校していくる環境を構築する。	・自己評価「B」であるにもかかわらず、改善方策があまり示されていない。指導や雰囲気作りの成功と失敗を分析し、生かしてほしい。 ・定期的に立哨活動に参加しているが、生徒の表情や姿などが清々しく、挨拶もしっかりしている。更に取組を進めてほしい。 ・生徒会活動は母校愛につながり、生徒指導にも効果が期待される。 ・教育相談について、その目的や効果、問題点を目に見えるものとして示してほしい。 ・生徒が主体的に取り組める活動を増やし自主自律するための工夫してほしいす。
	生徒が主体的に学校生活を構築して、社会貢献に努める姿勢を醸成する。	地域の行事に、生徒が積極的に参加できるよう調整をはかる。保護者アンケート（12月調査）において「学校の雰囲気がよく、生き生きとしている」でB以上の割合が昨年度を100として、102以上でA、95未満でC。	B		学校行事が例年通り開催できなかったことで、活動する生徒の様子を保護者に見ていただく機会がなかったが、保護者アンケートのB以上の割合は昨年度を100とすると今年度97であり、概ね本校の学校活動に理解を示していただいた。安全対策をとりながら出来ることを考え、生徒・保護者満足する学校作りをすすめていく。	生徒会の目安箱（意見箱）を活用し、生徒の様々な意見をもとに、生徒が主体的に取り組む行事の工夫や見直しを行う。	
	生徒支援・教育相談体制の充実に努める。	支援を必要とする生徒・保護者とスクールカウンセラー・医療機関、教員の円滑な意見交換をすすめる体制を構築する。保護者アンケートにおいて「学校の教職員は生徒理解に努め、生活指導面にも熱心である」でB以上の割合が昨年度を100として、102以上でA、95未満でC。	B		2月末までにスクールカウンセラーによる生徒・保護者対象のカウンセリングが37日間で196件行われ、スクールカウンセラー制度の活用、生徒や保護者に対する本校の支援体制が定着した。また、職員の生徒支援、教育相談との連携も円滑である。保護者アンケートのB以上の割合は昨年度を100とすると今年度は97.3であった。	スクールカウンセラー制度を保護者へ周知する。生徒支援のために保護者と密に連絡を取り、教員と保護者の連携をさらに進める。	
（4） 進路指導 キャリア教育	生徒が主体的・能動的に活動し様々な物事に取り組む前向きな姿勢と学力向上を図り、進路第一希望の実現を目指す。	進路だより「Will」を各学期に1回以上、学年ごとに配布するとともに、各担任が具体的に説明を加える。保護者に対して三者面談の際に資料を用意して情報提供に努める。2、3年生に進路対策のための充実講座を実施する。 橿高生活アンケートで、3年生徒の進路決定先満足度が50%以上かつ3年生保護者の学校の進路実現に対する指導の満足度が70%以上でA、生徒の満足度が40%未満かつ保護者の満足度が40%未満でC。	A	A	進路だより「Will」をはじめ、生徒・保護者に進路情報誌や各種プリントを配布し、最新の情報を元に具体的説明を加えるなどの展開を行った。Willは、定期考査直後、三者面談、共通テスト直前等に合わせて各学期に1回以上発行した。校外模試や進路講演会については当初の年間計画とは変更になったが、各学年とも1回以上実施した。1，2年生のベネッセ総合学力テスト模試は、文部科学省が定める「高校生のための学びの基礎診断」という観点から、平日実施で行い、全員が受験できるように体制を整えた。充実講座を、各教科の先生方の協力のもと計画通り実施したが、3年生は2学期以降の受講数が年々減少してきている。橿高生活アンケートの結果3年生の満足度は93%、3年保護者のアンケート結果による満足度は80.2%であった。	進路学習は、時代の変化に対応した形で、高校3年間を見通した内容でバランスよく設定する必要性がある。進路講演会の内容も、生徒・保護者のニーズに注視しつつ、よりタイムリーで適切な内容で開催する必要がある。本校の過去の実績データをもとに、生徒・保護者の不安を払拭し、自信をもって日頃の学習生活ができるように促す。学年集会等では、学習の具体的内容について先輩の合格体験での成功例をベースに展開するなど、日頃の授業の大切さに触れる。また、生徒の主体的かつ能動的な各上級学校へのオープンキャンパス・講義体験への参加を促し、何事も目的意識をもって行動することが大切であることを認識させる。自己の活動記録(キャリア・パスポートや個々の進路手帳)等を活用することで、学校、家庭及び地域における学習や日常生活の見通しを立て、学んだことを振り返りながら、新たな学習や生活への意欲につなげる。将来の生き方・在り方等を考える活動を自ずと行うことができるように働きかける。	・全体的によかった。 ・大学を目指す生徒に、大学教育の目標・目的を自分のものとしてもたせ、大学入学後に学ぶ意欲を失った学生とならないよう、持続して学ぶ力を身に付けさせてほしい。 ・様々な職業で活躍してトップランナーから話を聞く機会があればいいのではないか。 ・ キャリアパスポートを具体的にどのように活用するかを検証し、効果的ないものにしてほしい。
	キャリア教育の視点に立って、生徒自らが可能性を高め、挑戦し、夢のある社会で活躍できる人材育成の実現を目指す。	HR、総合的な学習の時間、放課後の時間に進路講演会や各大学ガイダンス等を実施する。教員が校外の研修会に積極的に参加し、またインターネット等を通して情報収集をはかり、生徒、保護者に進路情報全般の提供を行う。 橿高生活アンケートで、3年生徒の満足度が60%以上かつ3年生保護者の満足度が60%以上でA、生徒の満足度が40%未満かつ保護者の満足度が40%未満でC。	A		DS/LHRにおいて進路分野に関する内容を実施した。新しい学力の3要素である教科学力【知識・技能】はもちろんのこと、ジェネリックスキル【リテラシー(思考力・判断力・表現力)・コンピテンシー(主体性・多様性・協働性)】を育成することを主眼として展開したが、まだまだアプローチに再考の余地がある。進路実現のために、自己分析と適性(学問・職業)理解に基づいて主体的・能動的に自己実現を図る契機として第1，2学年対象に「学びみらいPASS」を実施し、振り返り講演会等も併せて実施することで、自らの可能性を広げる自信に繋げた。保護者対象の進路講演会及び生徒対象の進路講演会や大学・医療看護系・就職公務員希望のガイダンスを実施した。県が主催するインターンシップ及び看護体験研修会参加を教室掲示等により適宜紹介を行った。また、教職員対象のWEB進路講演会に第3学年担当教員と進路指導部員が参加した。橿高生活アンケートの結果3年生満足度は66.6%、保護者アンケートの結果3年生保護者の満足度は80.4%であった。		
（5） 人権教育	「人権教育推進プラン」を踏まえて、人権HRで参加体験型学習をより充実させる。人権講演会を実施して、多様な人々の思いや願いを理解するとともに、自分の命も他人の命も大切にできる生徒を育てる。	人権教育HRの内容「高齢者の人権（1年）」、「労働者の権利（3年）」、「外国人との共生（3年）」を工夫する。「性の多様性」に関する人権講演会を実施する。「3年人権学習アンケート」で「各人権問題の解決は自分の意識や生き方と深く関わっていると思う」との回答が75%以上でA、50%未満でC。	A	A	「高齢者の人権」ではシニア体験めがねを装着するなど疑似体験により支援方法を考えさせた。「労働者の権利」でブラックバイト、「外国人との共生」でヘイトスピーチの問題を取り上げた。「性の多様性」に関する人権講演会はモニター開催ながら生徒の心に浸透する内容であった。3年人権学習アンケートの結果、「各人権問題の解決は自分の意識や生き方と深く関わっていると思う」との回答が80%であった。	生徒の人権意識をさらに高めるため、各学年の人権ホームルームと人権講演会で、身近なテーマやより深く考えさせることができる内容を取り入れていく。また、 教員の人権意識向上のため、全体研修には最優先で参加することを共通理解してもらう。	・押しつけにならないように配慮し、生徒に考えるきっかけを作っている姿勢はよかった。 ・よりシャープな人権意識をもつ生徒の育成を期待する。 ・社会の矛盾をしっかり考えさせ、自分の意見をしっかりもつ人材を育成してほしい。 ・ 新しい人権課題等について、先生方の人権意識を高めるための研修などをより充実させ、全教員が研修できるよう工夫をお願いします。
	教職員の校内及び校外での研修の機会と内容の充実を図り、それらを積極的に利用して人権感覚を磨き、生徒への指導に生かせるように努める。	校内研修として「インターネットと人権」に関する全体研修を年1回、人権HR開催前の学年研修を各学期1～2回実施する。また、高人教等主催の校外研修に積極的に参加する。校内研修がすべて計画通りに実施でき、かつ全体研修に教員の80%以上が出席すればA。計画通りに実施できない校内研修があって、かつ全体研修への教員の参加が80%未満でC。	A		「インターネットと人権」に関する全体研修は、新型コロナウイルス感染症対策のため参加人数を制限し、管理職,担任,人権教育部員などを対象として実施した。対象者の81%が参加した。資料は全職員に配布し、有意義な内容であった。高人教等の研修会は全て中止であった。		

(6) 文化図書 教育	本を読む楽しさと文字に親しむ習慣を身につけ、豊かな感性と教養を育む。	週2回（各15分）のSSR（持続的黙読）を軸に、読書の楽しさと意義を実感し、生涯にわたって本に親しむ習慣を育てる。橿高生活アンケートで「SSRについて」の満足度が6.5ポイント以上でA、5.0ポイント未満でC。	B	B	2学期から本格的に活動し、1・2学年ではER（英語多読の取り組み）を週1回の割合で導入した。生徒、教員ともにSSRを肯定的に受け止める声がきわめて多かった。ERにおいては、英語科との協力のもとで、書籍等が充実してきた。橿高生活アンケートの結果満足度は5.0ポイントであった。	「SSRはよかった」と述べる生徒も多いが、読書の習慣化というにはまだまだ不十分である。また、令和4年度からの校時変更に伴ってSSRの時間帯の持ち方においては検討をしなければならない。	・今後もSSRを進めてほしい。 ・電子書籍での読書が普及する現状を検証し、どのように活用していくかを検討する必要がある。 文化に触れる意味を理解しながら、体験活動を取り入れていくことも考えてほしい。
	文化活動を充実し、生徒の知性と創造力を育成し、協労力を養う。	文化行事をとおして知的好奇心・創造力を育て、高校生としてふさわしい文化意識の獲得を目指す。学校全体の取組として、年間4回以上の文化行事等を実施し、橿高生活アンケートで文化行事の満足度が6.5ポイント以上でA、5.0ポイント未満でC。	—		文化行事の多くが中止、代替えとなり、教員、生徒、保護者も満足のいく内容には到達できなかった。2020 Kashiko expression of cultureは文化部の発表の場として満足のできる内容であった。特に学級内での文化活動が不十分であった。	保健体育部や各分掌と連携し、新型コロナウイルス感染症防止の観点を念頭に置き、文化活動が実施できるように要項や計画を立案する。	
(7) 体育 健康教育	全生徒が、充実した高校生活を送れるよう、健康・安全教育を推進する。また、体力の向上を更に図る。	学校保健委員会を開き、生徒の健康・体力の状況について実情を精査し、改善を図る。また、「保健だより」の発行により、生徒個々の健康に関する意識を高める。体力テストの結果において、各学年男女別で全国平均を10項目以上上回った場合A、3項目以下の場合C。	-	B	新型コロナウイルス感染症の拡大を受け、授業・部活動など学校生活全般で、換気や手指の消毒の徹底を図り、生徒の健康・安全対策を講じてきた。また、毎月1回「保健だより」を発行し生徒の意識を高めてきたが、一部の生徒が自分のことと捉えていないと思われる。体力テストは2種目が実施できなかった。	新型コロナウィルス感染症の感染状況によっては、今年度以上の対策が必要になることも勘案し、さらに生徒の感染予防の徹底を図り、健康・安全対策に取り組んでいく。	・コロナ禍で、様々な体育活動が制限される中、これを前提にした新しい学校づくりが求められている。 ・生徒の体力を付けることやスポーツを愛することも大切だが、健康を学術的に捉えさせる機会を設定することも大切である。
	保健体育行事において、生徒が自主的かつ主体的に参加できるように工夫する。	橿高生活アンケートで「球技大会」、「体育大会」「クロスカントリー大会」の3項目の満足度平均が6.0ポイント以上でA、4.0ポイント未満でC。	B		球技大会・クロスカントリー大会は中止、体育大会は午前中のみの開催となった。実施種目も大幅に変更した。十分に生徒たちの意見を聞き取る機会を設けることが出来ず、生徒の自主性・主体性を導く大会の開催はできなかった。橿高生活アンケートの結果、体育大会の満足度は5．8ポイントであった。	各体育行事の開催方法について、現段階で予断を持って計画できない状況であるが、生徒主体の行事の持ち方について模索していく。	
(8) 環境整備 防災教育	学習に専念できるよう、生徒が自分たちの手で校内の美化ができる姿勢を養う。	環境整備委員による校内美化を啓発するポスター作りや、日常の清掃活動をとおして生徒の美化意識を高める。橿高生活アンケートで「校内環境美化につとめた」が6.0ポイント以上でA、5.0ポイント未満でC。	B	A	保護者アンケートより86%以上の保護者が環境美化、清掃が十分できていると評価している。大掃除では、まず身の回り(私物、机、イス、ロッカー)の整理から始めるよう計画したが、日頃から整理をする習慣へとはつなげることができない生徒もいた。橿高生活アンケートの結果は5.4%であった。	校内外の美化意識を高める継続的な指導。環境整備委員会活動の継続と活性化を図る。	・コロナ禍の中にも関わらず、可能な範囲で適切に取り組んでおり、引き続き取組を進めてほしい。 ・防災、減災に向けて、一人一人として何ができるのかを常に意識させることが肝要である。 ・生徒会活動を活用して、生活環境がどのような状況であるかを調査分析し、継続することや改善することを視覚化化し、更なる取組につなげてほしい。 ・防災・減災についての講演や研修を取り入れてほしい。
	震災、火災等に備えるための避難訓練などをとおして自らの身を守る行動の習得と防災に対する意識を高める。	生徒の防災意識を高める避難訓練・火災訓練を実施し、自らの身を守る行動を身につけさせるとともに防災意識を高める。訓練実施後の生徒アンケートで「防災について理解できた」が70%以上でA、50%未満でC。	A		防災訓練は、地震を想定して行い、避難経路の安全確認、地震発生直後の防御姿勢に重点をおいた。実際の避難では、周囲の状況を的確に把握し、適切な場所への避難が求められる。今年はパワーポイントを利用した防災教育を実施し、避難訓練は蜜を避けるため机上訓練で行った。アンケートの結果では95%以上の生徒から「防災について理解できた」と回答が得られた。12月は1年の環境整備委員による消火訓練を実施し、2月には防火訓練を実施した。	日頃からの防災意識を高めるため、避難訓練・シェイクアウト訓練に加えて、あらゆる機会で防災、減災に向けた呼びかけを行っていく。	
(9) 学校評価 広報 国際理解	本校独自の教育内容の構築に努めるため、学校評価システムの改善を図る。	生徒による授業アンケートを年2回、橿高生活アンケートを年1回、保護者によるアンケートを年1回実施する。すべてのアンケートにおいて評価項目の見直しを図ることができればA。全く見直しができなければC。	A	A	各アンケートにおいて評価項目の見直しを図り、質問内容の精選を行った。特に授業アンケートでは在宅教育も含め、生徒の満足度をより測ることができるよう工夫した。	これまでのアンケート結果を精査し、顕著な違いが現れるものについて原因を明らかにし、改善すべき点については具体策を検討する。	・「改善方策等」の実践を期待する。 ・学校評価の結果をグラフ等で視覚化・簡略化し、適切な分析につながるよう工夫してほしい。 ・情報収集や情報提供の場の更なる拡大など課題はある。
	中学生やその保護者への広報活動を積極的に行う。	中学生やその保護者に本校の魅力を伝え、より多くの中学生が本校を志望するように、学校案内やホームページを活用し、広報内容の改善に努める。オープンスクール実施後のアンケートで「よかった」が80%以上でA、60%未満でC。	-		学校案内パンフレット郵送中学校数68，進学説明会参加数3であった。総アクセス数が2600あったe-オープンスクールやテレビメディアでの学校紹介を行った。保護者アンケートより「ホームページをよく見る」との回答が昨年度より7.4ポイント増加した。	中学生、保護者が必要とする情報を的確に把握すること。ホームページの内容をできるだけ最新の状況に維持するための方策を検討する。	
	外国の文化への関心を高める。	ホームルーム・集会・総合的な学習の時間の内容改善を図り、海外研修、短期・長期留学事業の紹介に努める。外国の文化への関心を高めるため、新聞を年間3回以上発行する。3回以上でA、1回でC。	B		総合学習の時間を利用した海外文化セミナーを行った。海外研修・短期・長期留学事業については教室掲示により適宜紹介を行った。ALTと協力し、新聞を2回発行した。修学旅行の行き先は変更になったが台湾交流校との手紙のやりとりを行うことで関係の継続に努めた。	海外文化セミナーについては、異文化を身近に感じられるような内容に改善していきたい。新聞の発行時期・内容・回数についてもよりよい形を考えていく。台湾交流校とは、互いの国や学校などをより深く知ることができるような内容を検討していきたい。	
(10) 事務	学校生活における安全の確保及び環境整備に努める。	定期的な校内巡視を行い、不良箇所などを早期発見・迅速な対応に行い、生徒の安全対策を図る。	A	A	施設設備の老朽化により修繕が必要な箇所が多く、優先順位の高いものから順次修繕を行った。しかし築後40数年が経過していることから施設・設備において修繕の必要な箇所が多く見受けられる。	生徒の安全を第一に考え、また、教育活動に支障が出ないように未修繕箇所については校内で優先順位を精査する。その上で予算要求を行い、計画的な修繕に取り組む。	・施設設備の修繕記録を、職員や生徒、さらには一般の方にも確認できるよう情報提供があればよい。
	今年度に導入された「内部統制制度」を全教職員に周知し、効率的に業務を行うように努める。	「内部統制制度」の研修を行う。全教職員が「リスク回避実践チェックシート」を使って、リスクを回避し、効率的に業務が行えるように努める。	A		「内部統制制度」の研修を6月の職員会議で行った。中間報告をとりまとめたところ、全教職員がリスクを回避し、効率的に業務を行っていた。	内部統制制度の取り組みが継続できるように毎年研修会を行うなど、方法を検討する。	

第1学年	基本的な生活習慣の確立と社会に貢献できる人間形成の育成に努める。	日常生活において、挨拶の習慣と正しいマナーを身に付けさせる。年度末の学年総括で所属教員の70%以上ができていると判断したらA。40%未満でC。	B	B	B	新型コロナウイルス感染症対策で、入学当初から分散・時差登校の影響もあり、学年として全体指導が徹底できなかった。そのため、学校内外を問わず、規則正しい生活習慣や挨拶・携帯電話(ｽﾏｰﾄﾌｫﾝ)の正しい使用が、95%以上の生徒はできているが完全に徹底できなかった。また、授業の開始時等においても、次第に礼や挨拶が雑になっている場面もあった。	基本的な生活習慣や規範意識について、粘り強く指導を継続していく。	・モデルケースとなる学年であるので、学年全体はもちろん個々の生徒にも中止しながら指導に当たってほしい。 ・中学校卒業時や高校入学時に、例年のようなまとめや目標づくりができなかった学年であるので、押さえるべきところを卒業までに計画的に補ってほしい。
		日々の授業を大切にし、予習・復習・課題提出などを確実に実行させる。橿高生活アンケートにおいて、平日の学校外での学習時間が1時間以上とする生徒が70%以上でA。40%未満でC。	B			授業を大切に取り組んでいる生徒が多く、成績上位者にも部活動と両立しながら頑張っている生徒が多い。その反面、一部の生徒ではあるが考査前の学習に限られたり、予習・復習の学習習慣が身についていないところが見られた。橿高生活アンケートの結果は44.2%であった。	自己の目標を明確にし、何事にも主体的に取り組めるように指導していきたい。	
	人としての美しい心を養い、寛容の精神をもって人と接する姿を身につける。	人に対して思いやりのある行動ができる心を養う。自分にはない、他人の能力を認めることによって、互いを尊重する心を養う。橿高生活アンケートにおいて「重点目標を達成しようと努力している」が70%以上でA。40%未満でC。	B	B		新型コロナウイルス感染症対策ので影響で、学校行事の中止・縮小があったにもかかわらず、クラスでの生活や部活動において、ほとんどの生徒は、お互いを尊重する前向きな言動や行動が見られた。橿高生活アンケートの結果は68.3%であった。	お互いを尊重し、思いやりのある態度や行動が自然に出せる生徒を育んでいきたい。	
第2学年	主体的な進路選択に取り組み、その実現に向け基本的な学力を身につける。	自ら進路を考え決めるための時間として、総合（未来探究）、ホームルーム、学年集会の指導内容について生徒の実情をよく把握した上で実施する。2学期の模擬試験で80%以上の生徒が志望校をきちんと書ければA。50%未満でC。	A	A	A	新型コロナウイルス感染症対策で授業時数が少ない中、年間11時間、進路を考える時間をもった。学年集会では常に進路実現とその準備、結果の確認と積み重ねについて指導してきた。2学期の模擬試験における志望校については100%が記述できている。	大学、専門学校、就職、個々の希望に応じた情報提供をする。 真面目に学習する生徒がほとんどであり、授業を大切にすれば基礎学力は向上する。発展的な学力習得については、充実講座や模擬試験の復習を繰り返すよう促す。現在、学校外での学習時間が全くないという生徒も8.3%いるので、家庭学習が習慣となるよう強く指導する。	・本年度の経験を踏まえて、次年度にはすばらしい最高学年になることを期待する。
		「予習・授業・復習」の習慣化と基礎学力の定着に取り組ませるようホームルーム、各授業で声かけを続ける。橿高生活アンケートにおいて、平日の学校外での学習時間が1時間以上とする生徒が、70%以上でA。40%未満でC。	B			各授業や定期テスト前に集会を行うなど、家庭学習の時間の大切さを伝えてはいるが、まだまだ定着には至っていないと感じる。充実講座への参加者は98名、出席率は90%以上と高く、意識を持っている生徒も多数いる。学習時間に関するアンケート結果は61.8%が1時間以上と回答している。		
	行事や異文化理解を通じて、豊かな感性を磨く。	修学旅行とその関連行事の取組を工夫することで、外国の文化、日本の文化に興味関心を持ち、同世代の人との交流の意義を考える。また、ER（英語多読）の時間も積極的に取り組ませる。修学旅行の事後アンケートで、満足したが80%以上でA。50%未満でC。	A	A		新型コロナウイルス感染症対策もあり、行き先が台湾から北九州となったが新型コロナウイルス感染症対策を徹底して修学旅行を実施することができた。その結果、事後アンケートでは「満足した」が85.4%（「やや満足した」も含めて98.7%）であった。またERに関しても各学期に1時間ずつ実施することができた。	コロナ禍が続くことを考え、学年として今年の経験を活かしながら行事の工夫をしていく。生徒の豊かな感性、積極性を育てていくためには、他者と協力して何かを作っていくこと、その成功体験を得る機会を増やしていきたい。 また、橿原高校生としての自覚を持ち部活動を含めて各自行動できるよう、ホームルーム運営を計画し実行する。	
		部活動や修学旅行、体育大会・文化祭などの学校行事を通じて思いやりとお互いを尊重する心、他者に対する感謝の心を養う。年度末の学年総括で所属教員の70%以上ができていると判断したらA。40%未満でC。	B			新型コロナウイルス感染症対策で球技大会や文化祭、校外学習が中止となったため、生徒同士が協力し合い、行事をつくっていく機会が少なかった。その中で修学旅行を通じお互いを尊重したり、感謝の心を学ぶことができた。		
第3学年	基礎および実践的な学力を身につけ、進路第一希望の実現ができるよう教科や各分掌と連携する。	高大接続改革による新しい受験制度と受験生の動向を把握し、個々の進路希望に応じた情報を提供する。そのための集会や情報誌配布を年間10回以上実施する。90%以上の生徒が志望を決めて取組んでいればA。40%未満でC。	A	A	A	学年集会を10回、情報誌配布を10回以上随時行い、受験の制度や動向について伝えた。ほとんどの生徒（98%以上）が、2学期末に受験カレンダーを作成、期日内に出願を終え、志望の実現に取り組んだ。	受験制度が変わったことに加え、保護者の意識や生徒の希望が変化していることを認識し、進路指導をする。オンラインによる進路研究、志望動向の解説もあり、積極的に参加し、生徒の状況に応じた利用をする。授業への参加は進路実現への第一歩であるため、授業をより一層充実させる。	・最高学年であるにも関わらず、コロナ禍の影響で満足できる1年ではなかったと思うが、その中でも、学校の教育・指導のおかげで「強さ」を感じさせてくれた学年であった。
		基礎および発展的学力の習得を目指し、授業を大切にさせる。充実講座を実施し、模擬試験のやり直しをさせる。橿高生活アンケートで、授業、自宅学習、充実講座を重視した生徒が80%以上でA。30%未満でC。	B			授業への参加、授業の大切さを常に生徒に伝えた。基礎基本の仕上げとなる1学期に充分な指導時間を持てず、模擬試験が自宅受験となり、進学希望の生徒に不安や迷いを与えた。充実講座への参加人数も少なかった。橿高生活アンケートの結果は68.8%であった。		
	充実した学校生活を送るよう、生活習慣を安定させ、豊かな感性を育む。	自己の進路実現に向け努力するなかで、互いの努力に気を配り、One Teamとして進路実現を目指す雰囲気づくりに取り組む。橿高生活アンケートで、役割分担に積極的協力、級友への手助けができた6.0ポイント以上でA。3.0ポイント未満でC。	A	A		互いの気配りや周囲への感謝について、特別に学年集会を設け全体に指導した。11月～12月の欠席数は7%程度であったが、1月は感染増もあり、15%程度の生徒が欠席した。橿高生活アンケートの結果は6.2ポイントであった。	学校を休まないことが、生活を安定させ、様々なことを良い方向に向ける。生徒への意識付けを常にする。 学校行事や部活動の大会・発表会については、コロナ感染症の終息が見通せず、充分な指導は難しい。出来る範囲の中で成果を達成できるよう努力する。	
		部活動は最後までやりきるよう、学校行事は一丸となって楽しむよう、部活動、ホームルーム運営を計画し実行する。年度末の学年総括で所属教員の70%以上ができていると判断したらA。40%未満でC。	A			コロナ感染対応のため、部活動の大会や学校行事の多くが中止となった。実施できた部活動大会や発表会、体育大会やホームルームの自主活動では、それぞれの生徒が全力で取り組んだ。		